

発行：(福) 十字の園本部事務局
理事長 平井 章

住所：〒431-1304
静岡県浜松市北区細江町中川 7220-11
tel 053-436-9535
fax 053-437-1352

社会福祉法人 十字の園

ぶどうの木

(ヨハネ福音書 15章)



「主の祈り」を唱えるとき

平和の杜 施設長 森 茂廣



平和の杜では、朝礼時に「主の祈り」を唱えています。スタッフは、きっとそれぞれの想いを抱きながら、この祈りの言葉を聴き、また口ずさんでいるのだらうと思います。

私について申しますと、かつて、この祈りを唱えるとき、まるでこの世の不幸のすべての責任は創造主である神様にあるかのように、神様に努力の足りなさを請求するような祈りになっていたことを覚えています。

しかし、戦争や、病気や貧しさのために、悲しみを増幅させているかにみえる人類歴史の背景に、「心を痛める神様の姿・切実な神様の祈り」を感じるというある歴史家の思想に触れ、心動かされてより、私たちの心に、絶えず、静かに語り続ける「祈る神様の姿がある」ことを実感するようになりました。

この頃では、唱えながら、神様の声に耳を傾ける、心の中で反芻するように味わう、そんな静かな主の祈りを心がけるようになりました。私たち一人ひとりを大切に思っていて下さる神様の切実な想いを、全身で感じ、そしてその祈りに応えるわたしたちの日々の歩みが始まるのです。「みくにが来ますように!」「み旨が天に行われるように、地にも行われますように!」と静かに、繰り返し反復するとそこには「誰もがみんな支えあい、助け合って幸せに生きる社会」、ノーマライゼーション社会の実現へと続く一筋の道が見えてきます。

いま、神様が望んでおられる「みくにの姿」、「み旨の内容」があふれでて、「一人ひとりの幸せと、共に生きるみんなの幸せ」を願う私たちの日々の歩みになるのです。

平和の杜の朝礼時の「主の祈り」はそのような願いをこめて、唱えることにしています。

1. 地域密着型介護サービスとは

平成18年4月より地域密着型サービスが創設されました。地域密着型サービスとは、高齢者の住み慣れた地域での生活が継続できるようにとの観点から考えられた新しい体系です。介護保険の事業者指定は、都道府県が指定・監督を行っておりましたが、今回創設される地域密着型サービスについては、事業者指定とともに、指導及び監督についても、より目の届きやすい市町村が行うこととなります。また、身近なところでサービスが受けられやすいように、事業所のある市町村の被保険者だけがサービスを利用できます。また、市町村の実情に応じて施設整備の計画を進めることができますし、地域の実情に応じた介護報酬が設定できるというものです。

2. 地域密着型サービス6種類

地域密着型には、①夜間対応型訪問介護、②小規模多機能居宅介護、③認知症対応型通所介護、④認知症対応型共同生活介護、⑤地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護（定員29人以下の特別養護老人ホーム）、⑥地域密着型特定施設入居者生活介護（定員29人以下の介護専用型特定施設）の6種類があります。

3. 浜松十字の園における展開

地域密着型サービスを始める前は、特別養護老人ホーム（定員120人）、短期入所（定員20人）、通所介護（定員20人）、訪問介護、居宅支援事業の介護保険サービスにて地域への支援を実施してきました。自分らしく、その人らしく生活していただきたいと、既存施設でのユニット・ケアの方法を取り入れたり、独自の個別サービス計画のためのシートを作成したり、適格なサービス提供のために施設・在宅サービス基準指針を作成したり、家庭的な雰囲気を作るための工夫もしてきました。在宅で生活し続けられるための支援にも目を向けてきました。しかし、これまでの制度には限界がありました。居宅のケアマネジャーが利用者のご家族の相談に応じて、居宅サービスを組み合わせる計画を立てていきますが、限界があるのです。



昨年5月に職員住宅を改造して認知症対応型通所介護「のんき」（定員7人）を開設しました。今年4月に小規模多機能居宅介護「あんき」を開設し、同時に介護保険適用外の通所事業「根洗荘」の運営を受託して運営を始めました。来年6月開設を目指して地域密着型特定施設入居者生活介護・ユニット型ケアハウス「第2アドナイ館」（定員20人）を開設します。

4. 浜松十字の園での総合力の発揮

いくつになっても若々しく元気で今までの生活を続けたいと思います。でも、その保障がないから不安なのです。第2アドナイ館ができることによって、十字の園はこの地域にあって様々な高齢生活を支援していく総合力が備わるような気がします。

自立（要支援）高齢者に対しては、在宅での生活には「根洗荘」を、施設での生活には「ケアハウス・アドナイ館」が利用できます。要介護（要支援）高齢者に対しては、在宅での生活には、通所介護（細江デイ・みをつくしデイ・認知症デイのんき）とホームヘルパー、ショートステイを組み合わせる利用できます。それを1年365日24時間の支援を希望すると小規模多機能ホーム「あんき」が利用できます。要介護高齢者の施設での生活には、軽度の場合なら特定施設入居者生活介護施設「第2アドナイ館」を、重度の場合なら特別養護老人ホーム「浜松十字の園」が利用できます。

本体である施設は、総合的な事業を運営することによって、地域における要介護（要支援）高齢者の生活を支援する拠点となります。ここが社会福祉法人と民間との異なるところです。

ご挨拶

理事 津幡 佳伸



この度、理事に就任させて頂きました津幡と申します。聖隷福祉事業集団における深い繋がりを覚えつつ、与えられた機会を通して十字の園が行う働きに学んで行きたいと思っています。日頃は聖隷福祉事業団の法人本部において、高齢者や障害者の在宅事業と施設の運営、保育園事業を行う在宅・福祉サービス事業部を担当させて頂いていますが、今後は両方の理事と言う立場で十字の園との連携や交流を一層深めていきたいと思っています。

25年も前の話になりますが、聖隷に入社したばかりの私は聖隷三方原病院の窓口会計係で、月に数回、救急外来の夜間事務当直の当番として急患の受付事務を行っていました。十字の園の入園者の方が、救急外来に運ばれることも少なくなく、夜勤の職員の方とともに当時、十字の園の園長をされていた綿鍋義典さんが付き添って来られていました。救急外来に入ると職員を帰され、綿鍋さんがお一人で残っておられる光景を何度か目にしました。暗くて寒い外来待合室の前で、長時間、祈るような姿で待ち続ける綿鍋さんの姿に十字の園の精神性を見たようで心が熱くなり、「将来、このような園長さんになりたい」と思ったものでした。その後、高齢者福祉を取り巻く環境は大きく変化し、介護保険制度の導入から福祉にビジネスという言葉さえ入ってきました。医療の現場も高度医療、専門医療へと進み、在院期間も平均20.5日から更に短縮されようとする流れから、高齢者の療養の場は施設だけではなく在宅を含む地域へと変化しつつあります。年齢を重ねても安心して暮らすことの出来る地域を支えるために、利用者のために祈り、寄り添ってきた十字の園の歴史と使命は、聖隷グループの高齢者福祉の基盤であると思っています。理事の一人として微力ながらも、真に利用される方に心を尽くした働きが為されるよう思いを新たにしています。何卒、よろしく願いいたします。

希望

社会福祉法人十字の園 評議員 齋藤 一彦



希望という言葉には、未来への期待が込められています。けれど、もう少し考えてみるとそれは現在に対しても大きな意味をもっているように思えるのです。どう言ったらいいかよく分かりませんが、この言葉は今の毎日の元気の素を作っているようにも思えます。

平成になって以来、十字の園にはケアハウスアドナイ館が誕生し、特養にユニットケアシステムが導入され、「みをつくし」や「のんき」が作られ、「あんき」が誕生しました。このような介護形態の多様化は社会の期待に応えるものですが、同時に十字の園という法人の大きな決断によって世に出たものでもあります。こうした多様な介護の姿は、地域の高齢者やその家族、惹いては地域全般の人達が現在の充実と将来への希望をもつことに繋がります。アドナイ館には「希望の日」があります。毎年、暑い夏がようやく去っていくぶんの涼味を含んだ風が吹き始めたなと感ずる敬老の祝日近くのいち日、入居者の長寿を祝い祈念する式典に併せて職員の皆さんが知恵を集めてお楽しみ演目を繰り広げる楽しい日です。以前は、単に敬老の日祝典と言われていた一日に、いつの日か職員から何か名前をつけましょうよ、と提案されて、入居者の投票もして決められました。「希望の日」はアドナイ館の総意が込められている名前でもあります。

来年の夏前には、アドナイ館の南東、浜松十字の園の一番高い地点に第2アドナイ館が新築され開館します。第2アドナイ館は、自分のことは自分ですと心には決めていても体の動きがもう一つ付いて来ないお年寄りにそっと支援の手を差し伸べて日々を明るく過ごせるような役目を負って作られると聞いています。第2アドナイ館は高齢者が暮らして行く上の新しい希望となることと思います。

2008年十字の園大会報告

10月22日(水)、23日(木)と「第13回十字の園大会」が行われました。今年度のテーマは「より質の高いサービスとは」というものでした。

基調講演に加藤はる先生(元浜松十字の園介護長)、課題講演には米山武義先生(米山歯科クリニック医院長)をお迎えし、90分という短い時間ではありましたが、本当に素晴らしいお話しをお聞きすることができました。施設発表では、今年度のテーマである「より質の高いサービスとは」について、各施設、様々な視点から取り組まれており、改めて十字の園の職員のレベルの高さを実感しました。また、今年度は新たな試みといたしまして、「第11回十字の園大会」で事例発表を行いました介護タクシーについて、その後の経過報告ということで掲示による発表を行い、多くの方が掲示板の前で足を止めて熱心にご覧になって下さいました。

最後に、皆様方のご支援、ご協力により今年度も「十字の園大会」が無事に終了しましたことを心より御礼申し上げます。



基調講演

『十字の園で大切にしてきたこと、していきたいこと』

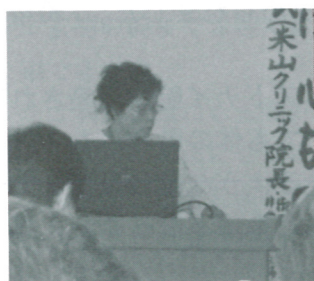
元浜松十字の園介護長 加藤 はる 氏

1966年に十字の園に就職してから定年を迎えるまで33年間、「夕暮れになっても光がある」という聖書の言葉…「夕暮れ」=「お年寄り」になっても「光」=「可能性」があるということをお年寄りとの出会いで実感してきたそうです。多くの出会いの中から3つの事例をお話してくれました。

- ・ 記憶が戻り御自分の使命を思い出した高村さんの例では、記憶及び言語喪失になったこの方が、文字を書く練習をし、多くの人と関わりながら御自分の名前を思い出し、漢字で名前を書いたとのことでした。多くの活動に参加され、召される間近には自分から手を差し伸べられ、職員一人ひとりに固い握手を交わされたそうです。この経験は介護士として働く勇気と意欲と喜びを与えてくれたそうです。

- ・ 頸椎損傷と闘いながらワープロをマスター、短歌に取り組んだYさんの例では、交通事故で頸椎損傷、四肢麻痺になったこの方に、短歌を作ることを勧めたそうです。指導して下さる先生にも恵まれ、同人誌「野榛」に入会、毎月投稿するようになり、十字の園短歌教室も発足したそうです。医者のお勧めでワープロを始め、ワープロで短歌を作りつづけ希望の光を灯し続けたそうです。この事例からは、一緒に考え共に生活を豊かに方向付ける事ができ、生きがいを感じ幸いを得たということです。

- ・ 癌と闘いながら文化刺繍と短歌を続け、今までの記憶を綴り自分史「夕暮れの中で」を発刊したHさんの例。癌のため再入院を繰り返し一人暮らしが困難になった時に十字の園に入園されたそうです。体調が思わしくない中、文化刺繍ですばらしい作品を作って言ったそうです。短歌、野榛の会に入り、十字の園短歌教室にも参加し、その時々気持ちを歌に現し一日一日を大切に過ごされたと言うことです。「夕光の中で」はそうした中まとめられたもので、この中には福祉に携わる方に対し「ただ大切に寝かしておくばかりが愛ではないと思います。人間は生きている間は何かをしたい。やってみたいと思うのが常です。その人にあったもの、なんでもやれるように力を貸してくれることこそ大切な愛ではないでしょうか。」と書かれているそうです。



次に開設当初の実際のお世話の話をして頂きました。礼拝、環境、入浴、排泄、食事、行事、勉強会などについてスライドと共に説明してもらいました。働いていく中ですばらしい出会いがあった事を伝えて頂きました。皇太子・美智子様、ハニ姉妹、マザー・テレサです。多くの先輩たちが築き上げた十字の園で働くことのすばらしさを教えてくださいました。

時間の都合で、最後は写真を見るだけになりましたが「残したいもの、大切にしていきたい事を考えましょう」として話を結ばれました。

課題講演

「口は長寿の門」～口が開けば心も開く～
「十字の園から始まった口腔ケア」

米山歯科クリニック院長 米山 武義 氏



2015年より「本格的な超高齢化社会」がスタートし、2025年のピーク時には、後期高齢者の人口が実に3500万人に達し、さらに、認知症を併発する高齢者の数が250万人に達するというデータを解説されました。

日野原重明先生の言葉、「健康長寿を目指してください」「人の命には与えられるものと勝ち取るものがある」をあげ、勝ち取るものには、個人の生き方の選択が深く関わり、「食・動・休・考」の選択によると述べられた。

続いて、国は介護予防を示唆してきたとして、①要介護状態になることを防ぐこと、②要介護状態になった時にこれ以上悪化させないこと（維持向上）を挙げられ、重度になった人も介護予防の対象であり、又、介護予防はターミナルまで見据えたものであるべきと述べられた。次に大田仁史先生の「介護よければ終わり良し、終わり良ければすべて良し」という言葉を挙げられ、著書『お棺は意外に狭かった！』より“ターミナルケアになぜリハビリが必要か”を説明された。人が最期に入るのはお棺であり、意外とお棺に入らない方が多く、入らない時はどうするか…等の話から、「そこ（ターミナルケア）までやって介護予防なんだ」と述べられました。

茨城県立医療大学のサワ先生の研究報告より、退院時、日常生活動作はリハビリにより改善しているが、うつ状態やQOLは改善していないことを挙げ、病院に行けば全て改善してくると思うのは間違い、身体的には治っても心の問題は解決しないまま在宅や施設に帰される。しかし、病院はその機能を持っていないので、どこかで心の糸を解いてあげないといけない。そこで、医療・介護に携わる者として「心」を理解して欲しいと話された。次に事例の中から「本当の健康の科学とは心の科学なのでは」「肉体のストレスを支えるものは心なのでは」と、心という根本を見誤らなければしっかりしたものができることと述べられた。また、その事例の中で、意識のあるなしはこちらが決めることであり、本人には伝わっているかもしれない、「穏やかなケアで利用者も穏やかになるものだ」「関わり続けることが大切だと、十字の園で学んだ」と話された。

続いて東北大学の研究、老人病院における主要な基礎疾患と直接の死亡原因より、脳を患って肺炎になって亡くなるケースが多いことがわかった。また、加齢により肺炎になるのではなく、加齢に伴う疾患や状態で肺炎になると述べられた。

最後に御殿場十字の園での治療、ケアの中から事例を一つ挙げ、本人、介護士、歯科衛生士の希望で義歯作成を試み、舌の不随運動等により困難と思われたが、結果、心配されていた舌の不随運動もなくなり、一番の楽しみである食事を楽しむ場面や、発語の改善状況等述べられ、講演を終了されました。

2008年 第13回十字の園大会 プログラム

22日	開会宣言	13:00	司会：中野 英和	
	開会礼拝	13:00～13:20	司式：中島牧師・奏楽：榊田	説教「神のもの」
	理事長挨拶	13:20～13:30	平井 章理事長	
	基調講演	13:30～15:00	加藤 はる先生	「十字の園で大切にしてきたこと、していきたいこと」
	課題講演	15:15～16:45	米山 武義先生	「口は長寿の門」～口が開けば、心も開く～
23日	施設発表1	9:00～ 9:25	浜松十字の園	「口から食べる」への挑戦
	施設発表2	9:25～ 9:50	御殿場十字の園	身体拘束ゼロ宣言
	施設発表3	9:50～10:15	伊豆高原十字の園	よりよい排泄方法をめざして
	資料掲示	10:15～10:40	介護タクシー経過報告	介護タクシー開業4年を迎えて
	施設発表4	10:40～11:05	アドナイ館	いつまでも自分の口でおいしく食べられるように
	施設発表5	11:05～11:30	松崎十字の園	その人のあった看取りの形
	施設発表6	11:30～11:55	平和の杜	養護老人ホームの役割と現状
	講評	11:55～12:05	青木克文・森茂廣 両施設長	
	閉会礼拝	12:05～12:15	司式：上野・奏楽：榊田	奨励「互いに愛し合いなさい。これが私の命令である。」
	閉会の挨拶	12:15～12:25	上野 貢一施設長	
閉会宣言	12:25	実行委員長：高橋 直輝		

太公望？

浜松十字の園 小杉 佳弘



浜松十字の園の近くを流れる都田川の河口付近は、釣り雑誌で取り上げられるほどハゼ釣りが有名なところ。9月ごろ～11月ごろまでの土・日・祝日には、近所の人や、遠方からも人が集まり、河川敷が人と車で一杯になります。

先日、以前はその近くに住んでおり、よくハゼ釣りをされていた男性入居者の方と一緒に掛けてきました。その方は、朝からやる気満々で、「ハゼはバカだからバカバカ釣れるよ。お昼のおかずは任せといて。」と職員や他の利用者さんに声を掛けて意気揚々と出掛けたのですが、結果、2時間ほどでたったの1匹。昼ごろには時計をチラチラ見ながら、「もうすぐお昼になるから帰ろうか？行きつけのお店でおごるから…。とんかつがいいかな？」と弱気な発言。

帰ってからも職員や他の利用者さんから「どうだった。たくさん釣れた？」と聞かれるたびに、「場所が悪かった。」「エサが良くなかった。」「潮の加減が…。」と2人で言い訳に必死。最終的には、「大漁。大漁。」と開き直ってしまいました。

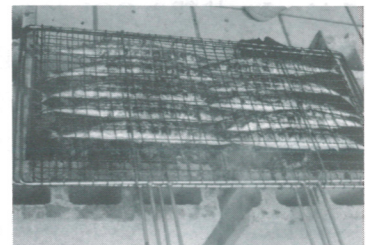
釣果は散々でしたが、晩秋の心地よい晴天の中、その方には、楽しく過ごしていただけたようですし、一緒にいろいろな話をしながら、ゆっくり、のんびり過ごすことができ、とても良い一日だったと思います。



白い煙はさんまの香り

御殿場十字の園 武藤 繁生

秋と言えばさんまというほどに、さんまは秋の風物詩ですね。昨年の秋から突発的に始まった旬を楽しむ「秋はさんま焼き」企画は、くろっちょを利用される皆さんの脳裏にしっかりと焼きついたようで、空に罫雲が見え枯れ葉が風に舞い始めると、誰彼となく「今年もさんまの季節だよなぁ～」と言い始めます。早速さんま焼きの三種の神器「ブロック」「魚焼き網」「炭」を用意して竈を作り始めます。昨年は気仙沼漁協からクール宅急便で取り寄せましたが、今年は例年に無く豊漁で津々浦々に出回っているとのことで、口元が黄色い鮮度の良い大きめのものを、近隣の魚屋さんから買い求めました。



炭を熾して焼き始めると、炭火に滴り落ちたさんまの油が「ジュッ」と言って白い煙となって立ち上り、御殿場十字の園の2階、3階の窓から寮棟に流れ込んで、施設丸ごとさんまの香りが充満してしまいます。「どこかでさんまを焼いている～」と大騒ぎになり、いつしか2階3階のベランダには、匂いを辿って「さんまギャラリー」が詰めかけるのですが、皆さんには煙と焼きあがりやを遠めに観ていただき、ふっくらと焼きあがったさんまは、しっかりとくろっちょの利用者の皆さんのお腹の中に納まったのでありました。ごちそうさまでした。

介護タクシー発進！

伊豆高原十字の園 青木 昌子

伊豆高原十字の園では、8月より介護タクシー事業が開始されました。十字の園では本所御殿場に次ぐ支所第1号となります。御殿場の先輩方や多くの方々のご協力を得て、ようやく開業となりました。

介護タクシー車両は、軽自動車ですが、車のナンバーも末広がりの『・・・8』と縁起がいい。車椅子1台が乗車でき、スロープ&ウインチで乗車、小回りがきくので玄関の前までお迎えに伺うことができ、付添いの方も楽々乗車できます。

ご利用者様にも大変好評で、病院・施設などへの送迎、買い物などの外出にご利用いただいております。

今日もご利用者様を乗せて、やさしい安全運転で、西へ東へ、介護タクシー発進です。



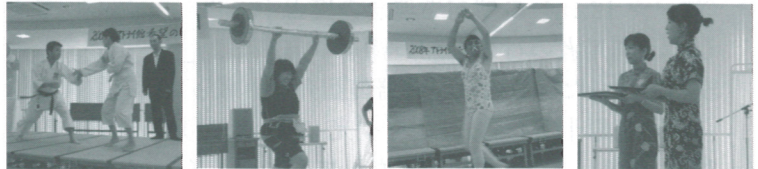
職員七変化 その2

アドナイ館 三輪 真理子

アドナイ館敬老行事「希望の日」のアトラクションのひとつ。今年はオリンピックイヤーで日本人選手の活躍にアドナイ館も沸いていたところです。職員による出し物の北京オリンピックハイライトにまたまた希望の日は大笑いの渦でした。

聖火リレーにはじまり最初は柔道。女性が男性を見事投げ飛ばすと、会場からは大きな拍手でした。次は重量挙げです。1000kgと書かれたバーベルが見事持ち上げられた時は、見ているみなさんも思わず力が入りました。次は400mリレーで、日本がアメリカに競り勝ちました。次に出てきたシンクロナイズドスイミングチームの演技は、あまりの素晴らしさに笑いをこらえるのに必死でした。最後は表彰式です。美しいチャイナドレスの美女達がメダルと花束を運んでくると会場から思わずためいきが…？

アドナイ館の職員はこれからも皆様に喜んでいただくべく、創意工夫していきます。



わかふじスポーツ大会に参加して

松崎十字の園 多田 高穂

9月21日早朝、天気予報で雨と予想される中、オリブ入居者と職員の8名で草薙陸上競技場に出かけました。雨天の場合、中止の可能性もあり、皆が不安感を持っていました。競技場に近づくとつれ、天気も回復してきました。皆、安心してると開始直前に、ザーッと雨が降り出してきましたが、県知事の挨拶のもと大会が開催されました。

大会参加される入居者一人一人、大会の直前まで一生懸命練習され金メダルを目標に頑張っておりました。雨の中カップを着用しながらの競技になりましたが、入居者の皆さんは北京オリンピックに負けないほど、白熱して競技に参加されておりました。

参加された入居者の方々は練習の成果を発揮し、『全員金メダル!』を取ることが出来ました。一生懸命競技される姿にとっても感動いたしました。競技終了後、ある入居者の方に尋ねると、「疲れないよ!」との返答に驚きました。今回、私は介助する立場で同行いたしました。初めての出来事、何をすべきか分からず



におりましたが、入所者の皆さんに暖かく助けて頂きました。振り返れば結果だけではなく、練習や競技する姿に入居者の皆さんにとって、何にも変えがたいものであり、普段の生活では味わえない貴重な体験であると思います。

この成果を静岡だけでなく松崎から日本へ発進できるよう『目指せ!パラリンピック世界へ発進!!』 努力は続く…

『平和の杜に響く「リーチ一発! ツモ!」 伊東市立養護老人ホーム 平和の杜 小川 晃

春ぐらいから時々体の不調を訴え元気がなかったAさん。「今一番何をしたいですか?」という問い掛けに即答で「麻雀!」と答えてくれました。Aさん実は大の麻雀好きで昔は相当?腕を振ったようです。しかし日程が合わずなかなか実現できずにいたら、そのうちAさんは体調を崩し入院してしまいました。残念!もっと早く対応しておくべきだったと後悔してもあとの祭りでした。

Aさんが退院した暁には、必ず場を設けようと心に誓い準備をはじめたところ、職員、入居者の中に他にも何名か麻雀が好きながいて、おまけになんと!厨房職員のYさんが麻雀卓と牌を寄付してくださいました。感謝です。一ヶ月で無事退院することができたAさん。体調が回復するのを待ちわび、やっと卓を囲んだ時の一言「この歳になって、また麻雀が打てるなんてなァ」それまで元気がなかったAさんが、牌を握った途端、生き生きとしてきて、まるで別人!牌を打つ時の真剣な目は、まさに雀鬼そのものです。…「よかったなァ…」とちょっぴりホッとしています。今も月に1~2度のペースではありますが、ジャラジャラと麻雀牌をかき混ぜる音が平和の杜に響いています。



✎ 各施設の機関紙について

各施設にはその地域、施設ならではの機関紙を法人機関紙「ぶどうの木」とは別に発刊しております。今回はそのいくつかを紹介させていただきます。

御殿場十字の園では、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」(ローマ12:15)の聖句を理念の礎として、利用者の行事参加の様子や施設内で行った研修内容、部署の紹介等が載っております。

伊豆高原十字の園では、「夕光(ゆうかげ)」との題で今回(10月号)より約10年ぶりに復刊しました。「夕光」とは「夕暮れになっても光がある」(ゼカリヤ書14章7節)の聖句から引用しております。年老いて人生の夕暮れするときになっても、歓喜、感謝、賛美等の生きる希望の光があるとの意味からきております。また、夕光には利用者の行事参加の様子や利用者が作った俳句も載っております。

アドナイ館では、「アドナイ刊」と題して「館」と「刊」を掛けた?ユニークな題が付いております。もちろん、聖書からの引用があり「主の山に備えあり」(創世記22章)の聖句です。職員の記事はもちろんのこと、入居者ご自身に書いていただいた記事も載っております。

その他、各施設の各部署(居宅介護支援所等)からも利用者向けの機関紙が発刊されておりますが、今回は限られた字数内でご紹介しきれませんので、省略させていただきますのでお許しください。どの機関紙もお堅い記事から微笑ましい記事まで、盛りだくさんに掲載されておりますので、ご興味のある方は、各施設にお問い合わせをお願いいたします。



🎄 十字の園のクリスマス・ツリーの由来について

十字の園のクリスマス・ツリーはドイツ式です。その由来は何であろうか?ツリーに使われている木はモミの木がほとんどであるが、なぜモミの木になったのだろうか?

モミの木は常緑樹であり、冬にも葉を茂らせて枯れず、強い生命力、永遠の命を象徴しています。ツリーに飾られるりんごは、エデンの園でアダムとイヴが食べた智恵の樹の実を象徴とし、ツリーの先端に飾られる星は、三人の博士を幼子キリストの元へ導いた「ベツレヘムの星」を表しています。

また、ルターの逸話として、クリスマスイヴのミサの帰りに見た、森の常緑樹の中に美しく輝く星々に感動し、それを子供たちに伝えるためにモミの木にロウソクを飾ったのが、始まりとする話があります。

銀のモールには、ヘロデ王から逃れてエジプトへ向かう途中、夜を過ごすために小さな洞穴に入ったヨセフ、マリア、幼いイエスをその洞穴にいた一匹のクモが



入り口にくもの巣を張り、追ってきたヘロデの兵隊の目を欺いたという話があり、そのくもの巣は夜露でピカピカと輝いていたことから、金や銀のモールはこの時のクモの糸を現しているとの説もあります。また、一説には天使の足跡という説もあります。

このように、ツリーの飾りにもそれぞれの由来があったなんて、驚きですね!

あとがき さわやかな日々「ホッとひといき」ついでる間に、だんだん朝夕冷え込む季節となりました。皆さんはいかがお過ごしでしょうか?平和の杜では昨年はメジロのヒナ、今年は何が元気に巣立って行きました。来年は何が巣立っていくのでしょうか、とても楽しみです。(川)

皆様の暖かい御支援をお待ちしております!!

〒431-1304 静岡県浜松市北区細江町中川 7220-11

社会福祉法人 十字の園

理事長 平井章

銀行振替 静岡銀行細江支店 普通 0015345